

レファレンス

コーナー

「台湾」を知ろう

澤田裕子

二〇〇四年三月、台湾で総統選挙が行われ、日本でもその過熱ぶりが報道された。外国人の目には「対中国」という国際政治的枠組みの中で二元的に捉えられがちな台湾。しかし実際には、民族的ルーツの異なるエスニック・グループが存在する。出自や母語の違いは、政治的、社会的処遇にも色濃く反映し、過激な選挙戦の所以ともなっている。ここでは、台湾社会への理解をより深めるための図書を紹介したい。

まず、政治を中心とした現代の台湾像を把握するには、柳本通彦『台湾革命——緊迫！台湾海峡の二世紀』（集英社二〇〇〇年）がわかり易い。台湾の人々は、もともとこの住民であるマレー・ポリネシア系先住民、福佬系・客家系漢族（総称して本省人）と、戦後に国民党とともに移住した大陸籍の外省人に大別できる。一九四九年以来外省人である蒋介石・経国父子が政治の実権を

握っていたが、一九八八年に初の本省人総統による李登輝政権が成立し、二〇〇〇年には直接投票により民主進歩党の陳水扁氏が総統に選ばれた。本書は、一九八七年から台湾で生活し、激動の歴史を見届けてきた著者のルポルタージュである。また、最近の著作では、近藤伸二『台湾新世代——脱中国の行方』（凱風社二〇〇三年）が読み易い。一九九九年に毎日新聞台北支局長として赴任した著者の経験をもとに、各界の主要人物との対話を紹介しながら、多様な意見が存在する台湾社会の実情を伝えている。

台湾社会には複数のエスニック・グループが存在し、もともと複数の言語が混在する。それが、日本統治期の差別政策に直面し、台湾に生活する人々の間にこれまでにない共同意識が生じるようになった。戦後は、国民党政府が標準中国語を国語として定め、これが今日の各エスニック・グループの共通語となっている。しかし、本省人と外省人の間には、言葉、習慣、権力配分などの面で、依然対立がみられるという。若林正文『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人——台湾人の夢と現実』（朝日新聞社一九九七年）は、一九九五年五月から翌年三月までの在台湾日記を編集したものである。当時緊張状態にあった台中関係を軸に、各分野の専門家と意見交換した内容を詳細に書き留めている。著者が記録する多様な考え方の背景にも台湾社

会の複雑さを窺い知ることができ、グループ間に対立があるにせよ、政治分野で民主化が進むにつれ、台湾の人々自身が自らのルーツ、さらにはアイデンティティをより深く探ろうという動きが起って来た。国立編譯館主編『認識臺灣——國民中學』（国立編譯館一九九八年）が

国定教科書として出版されたものそのひとつである。『認識臺灣』は歴史、地理、社会篇から構成されるが、ここでは歴史篇の日本語訳、国立編譯館主編 蔡身達・永山英樹訳『台湾を知る——台湾国民中学歴史教科書』（雄山閣二〇〇〇年）を紹介する。これまで台湾の学生は、自分たちの歴史として大陸中国の歴史しか勉強できなかった。そこに郷土史という位置付けとはいえず、台湾本土の歴史教科書が導入されたことは、大きな政治的政策転換であった。同書によって台湾史への認識が新たになるとともに、その特色として強調される「多元文化」「国際性」「対外貿易の興隆」「克己奮闘の精神」は、台湾を知るうえで重要な指針になる。

ところで、歴史が政治的に重要なのは、それぞれの政権によって当時の人々のアイデンティティが強く影響されてきたからである。本誌一九九八年一〇月号でも台湾アイデンティティに関する特集が組まれている。この複雑な問題を理解するには、若林正文『台湾——変容し躊躇するアイデンティティ』（筑摩書房二〇〇一年）を薦めたい。同書は、「日

本の南の隣人」である台湾について、その「短い複雑で濃密な歴史」を振り返ろうとしたものである。台中、台米関係にも言及し、内的、外的要因の双方から客観的に分析している。著者が、「台湾の理解にかかせないのが、台湾社会のエスニックな多様性」と述べているように、台湾のナショナル・アイデンティティが重要なテーマに位置付けられている。

ついで、言語とアイデンティティの関わりを文学史の観点から考察した資料として、山口守編、藤井省三「ほか」『講座台湾文学』（国書刊行会二〇〇三年）がある。同書は清朝末期から現代までの台湾を題材とした作品と作家自身の体験を通して、台湾アイデンティティが形成される過程を台湾、日本の双方の視点から描いている。世代が移り、「自分が育ち、暮らす土地への帰属意識」に目覚め、伝統と新しさを探し求めながら未来に向かう台湾の文化アイデンティティの行方が興味深い。

台湾文学の特徴として挙げられる「クレオール性（雑種性）」は、これまで紹介した図書にも「多元性」「多様性」という言葉で表現されており、台湾社会は、民族的、政治的、歴史的、文化的にみても、複雑な様相を呈しているといえる。このような「台湾」を多元的に知ること、東アジアの国際政治社会への理解もより深まるのではないだろうか。

（さわだ ゆうこ）アジア経済研究 研究所書館